

日本作業療法士協会 海外研修助成制度

実績報告書

学会名：WFOT Congress 2026

演題名：A Survey of Occupational Therapists on Employment Support for Individuals with Advanced and Terminal Cancer in Japan

会期：2026年2月9日～12日

開催地：バンコク、タイ

申請者

氏名：阿瀬 寛幸

所属：順天堂大学医学部附属順天堂東京江東高齢者医療センター

会員番号：19021

所属士会：東京都

1. 発表演題の概要

近年、がん対策基本計画や働き方改革の推進により、がん患者に対する就労支援の重要性が高まっている。これまで就労支援は主に診断時から治療期の患者を対象としてきたが、臨床現場では、進行がんや終末期がんの患者においても、「自分らしく生きたい」「社会的役割を全うしたい」「仕事を続けたい」といった就労への希望が認められる。身体機能や予後に制約がある状況においても、就労は単なる経済活動にとどまらず、社会参加や自己実現、アイデンティティの維持といった心理社会的側面において重要な意味を持つ。しかし、進行期・終末期がん患者の就労希望に対する作業療法の実践状況や支援上の課題について、全国規模で体系的に検討した研究は限られている。

本研究の目的は、進行がん・終末期がんを有する患者の就労希望に対する作業療法の実践状況を明らかにするとともに、支援における課題を整理し、当該領域における作業療法士の役割を検討することである。

全国のがん診療連携拠点病院に勤務する作業療法士を対象に、Web アンケートによる横断的記述的調査を実施した。調査内容は、作業療法士の背景、進行がん・終末期がん患者への臨床経験、就労支援経験の有無、患者の就労希望の背景、作業療法における合意目標の内容、ならびに支援に際して感じた困難点とした。分析には記述統計および質的記述的アプローチを用いた。

有効回答 283 名のうち、進行がんまたは終末期がん患者への就労支援経験を有する作業療法士は 119 名 (43%) であった。患者が就労を希望する目的は、「経済的必要性」に加え、「社会的役割・他者への責任」「自己実現・自己充足」といった心理社会的要因に基づくカテゴリーに整理された。作業療法における合意目標としては、フルタイムあるいは時短勤務

での復職のみならず、期間限定の復職、業務の整理や引き継ぎ、回想（ライフレビュー）、施設内での模擬的活動など、実際の就労には至らないものの患者の希望を尊重した多様な目標が設定されていた。一方で、予後の不確実性、体力低下や症状変動、家族や職場との調整の難しさ、支援体制や制度面の制約などが、就労支援における主要な困難として挙げられた。

本研究の結果から、進行がん・終末期がん患者の就労希望は多様な心理社会的背景に根ざしており、作業療法士は患者の価値観を尊重しつつ、現実的かつ柔軟な目標設定を通じてQOL向上を支援する重要な役割を担っていることが示唆された。

2. 学会参加と発表の印象

WFOT2026 に参加し、日本におけるがん作業療法の実践について発表する機会を得た。本発表では、進行がん・終末期がん患者が就労に希望を見出す背景や、その希望に対して作業療法士がどのように関わっているのかを紹介し、患者の価値観や人生観を尊重した支援の重要性について報告した。日本では、がんの進行や予後を踏まえ、就労を断念せざるを得ない状況に直面する患者も多い一方で、就労が社会的役割の維持や自己肯定感の支えとなる場面も少なくない。本発表では、実際の臨床実践を通じて、就労が単なる経済活動にとどまらず、患者の生活の質や生き方に深く関与していることを示した。

発表後には、各国の作業療法士から多くの質問や意見が寄せられ、がん領域における作業療法への関心の高さを実感するとともに、日本のがん作業療法の実践を世界の作業療法士と共有できたことに大きな意義を感じた。とりわけ、限られた時間や身体的制約の中で、患者の希望をどのように目標として具体化しているのか、また医療チームや社会資源とどのように連携しているのかといった点について、活発な意見交換が行われたことが印象的であった。

意見交換を通じて特に強く感じたのは、国の医療制度や社会保障制度、文化的背景の違いによって、作業療法士に求められる役割や働き方が大きく異なっているという点である。日本では医療機関を基盤とした支援が中心となる傾向があるのに対し、海外では地域や在宅、福祉制度と密接に連動しながら、より社会参加や役割獲得を重視した実践が行われている国も多くみられた。がん患者への支援においても、医療的側面のみならず、社会制度や文化に根ざした視点が支援の内容や方向性に大きく影響していることを学ぶことができた。

学会全体を通しては、がん領域に限らず、災害、貧困、ジェンダー、障害者の権利、地域づくり、教育といった非常に多様なテーマが扱われており、作業療法が生活機能の回復や維持にとどまらず、社会的課題や人権の問題に深く関与する専門職であることを改めて認識した。各国の発表では、それぞれの国や地域が直面する課題を背景に、作業療法士がどのように役割を拡張し、社会に働きかけているのかが具体的に示されていた。作業療法の概念は国を超えて共有されている一方で、その実践は極めて文脈依存的であり、社会や

文化の中で柔軟に形を変えていることを実感した。

また、国際学会ならではのプレゼンテーションの工夫や、聴講者との双方向的なディスカッションの活発さも印象に残った。発表者が自身の経験や問題意識を率直に語り、聴講者が積極的に意見を交わす姿から、知識の共有だけでなく、相互理解やネットワーク形成を重視する国際学会の意義を強く感じた。他分野の発表を聴講する中で、自身の専門領域を相対化し、新たな視点を得ることができた点も大きな収穫であった。

今回の WFOT2026 はタイで開催されたが、開催国としてのタイの印象も非常に強く残っている。会場となった都市は活気に満ち、人々は温かく、学会運営においても参加者を歓迎する姿勢が随所に感じられた。タイでは、仏教文化や家族観が生活に深く根付いており、地域社会の中で人々を支える価値観が医療や福祉の実践にも反映されている。学会で紹介されたタイをはじめとするアジア諸国の作業療法実践からは、限られた資源の中でも創意工夫を重ね、生活に密着した支援を展開している姿勢が伝わってきた。

また、アジア地域に共通する課題として、高齢化や慢性疾患の増加、都市化に伴う社会構造の変化などが挙げられ、それらに対して作業療法士がどのように関与していくのかについて、多くの示唆を得ることができた。制度的には整備が進んでいる日本においても、今後はより柔軟に地域や社会とつながり、医療の枠を超えた実践を展開していく必要性を改めて認識した。

今回の WFOT2026 への参加は、日本のがん作業療法の実践を国際的な視点で捉え直すとともに、日本において今後何が求められているのかを深く考える重要な機会となった。今後は、本学会で得られた知見や気づきを日常臨床や研究に還元するとともに、国際的な情報発信と交流を継続することで、日本のがん作業療法の発展に寄与していきたい。

3. 文献

- 1) 阿部佳奈子, 松本幸姫, 京田亜由美, 他. 終末期がん患者の就労に関する社会的苦痛の文献検討. 群馬保健学研究 2022 ; 42 : 42-52.
- 2) 久村和穂. がん患者が抱える社会生活上の問題と社会的支援の重要性. 現代のエスプリ 2010 ; 517 : 41-53.
- 3) 三木恵美, 清水一, 岡村仁. 末期がん患者に対する作業療法士の関わり—作業療法士の語りの質的内容分析—. 作業療法 2011 ; 30 (3) : 284-294.

4. 論文掲載情報 (学術雑誌に投稿し、論文掲載された場合に記載)

阿瀬寛幸, 櫻井卓郎, 関原雛子, 田沼明, 藤原俊之. 進行がん・終末期がんを有する患者の就労希望と作業療法士の役割—全国がん診療連携拠点病院を対象としたアンケート調査—. Palliat Care Res. 2025 ; 20 (4) : 251-258.